

2024年4月28日

「むしろ、喜んで自分の弱さを誇ろう」

コリントの信徒への手紙二 12:1-10

坂元 高牧師

私たちにとって、病気や弱さというのは、恥ではありません。大切なのは、私たちが弱い時にどういう態度をとるかではないでしょうか。

あの大伝道者パウロ、彼は私たちのキリスト教を世界宗教にまで発展させる基礎を成しましたが、元はと言えば、ユダヤ教の先頭に立って、新興のキリスト教徒を迫害しておりました。その彼が、死の十字架より復活された、イエス・キリストとの電撃的な出会いによって、イエスを迫害する立場から、イエスの教えを力強く宣べ伝える者へと、180度人生の大転換をしたのであります。

そんなパウロの生きざまから、私たちは、彼を大そう「強い人」と受けとめがちですが、彼の人々への中心メッセージは、なんと「自分の弱さ」ということでした。曰く、「私は弱い時にこそ、強い」「その弱さを誇りに思っている」「自分については弱さ以外は誇るつもりはありません」と言い切っているのです。普通の人だったら、むしろ、「弱さ」を隠そうとしますね。どうして彼は自分の「弱さ」を誇りに出来たのでしょうか。

それは、人生の大きな岐路にあった、パウロという伝道者が復活の主との「出会い」から、二つの大きな「勇気と希望」を与えられたということではないでしょうか。

(1) 神の力、キリストの強さは私たち人間の「弱さ」の内に現れてくるということは、事実であります。それは、私たちの祈りと礼拝によって深められます。

(2) パウロは、たび重なる試練の中でも、自らの「弱さ」を隠すことなく、その「弱さ」「苦しさ」を共に担って下さる、十字架の主に祈り、新たな希望を抱きました。

一主がおられますから、祈ればそのまんま、自分らしく生きられる。神、キリストへの信仰を誇りましょう。